

両足尊

幽霊

幽霊には足がありません。理想に燃ゆる未来を持ちません。暗い過去に囚われて
います。愚痴と呪詛と怨恨に動いています。現代の幽霊は決して暗の夜の柳の下に
出るには決まっています。昼の真唯中、大都会の繁華な巻を美しい衣服をつけて動
いています。我等は何を目して幽霊というか。先ず自律の世界にいないで、何事も他
のなにものかによつて動いている人を幽霊だと申します。

あなたはなぜそうしますか。こうしないと叱られますから。親に、兄に、先生に叱
られますからとて、叱られないように動くのです。あなたはなぜ自分の意見通りに行
いませんでしたか。世間がやかましく申しますから、いや世論が反対でしたから、い
や私の意見を言張ると不利な立場に立ちますから、そうした理由で、自分は正しい意
見を持ちながらも、心では残念でたまらないのに、皆に随つておくのです。こうした
人間が八方美人であります。八方美人ほど美しそうで嫌なものはありません。力に
も頼みにもなりません。

こうした人たちは、世論が湧いて来なければ、たと賢いことであっても実行しませ
ん。何よりも世間の無意味な反対をおそれます。世間の声を聞いて自分を培つてゆ
くというのではなくて、ただ無意味に世間をおそれるのです。この人を動かしている
のは、自分の衷心の声でも願望でも、意志でもなくて、それは世間であります。

こうした人は、たとえ「善い」ことをしていても、自分がしたのではなくて、文楽
座の人形芝居にすぎません。

こうした自分を自分で生きていないで、何事も他人によつて動いている人を「無道
義の人」と呼びます。よいことをしているようでも、美しき幽霊であります。

人生で一番大事であるところの結婚などでも、娘は嫌でたまらないのを親の権力で
無理に強制して、それに服従しない娘を不孝よばわりをし、泣き泣きでも親の無理を
通した時「孝行者」だという親があります。もちろん、子供の我ままや我慢を道だと
いうのではありませんが、権力に泣きへ服従するのが決して孝行ではありません。自
分を真に生かすのが孝なのです。私は決して妹たちを「かたづけ」ません。一生涯に
いたつて恥だとは思いません。彼等が衷心の願いのままに独立して歩む人に自らを
育ててくれることを願っています。

人間は案外お人好しであります。ですから人のおだてにのります。ワイワイはや
したてられるとつい有頂天になつて騒ぎはじめます。おだてられて動いていた者は、
おだてる大衆がいなくなると、ぼつたり火が消えたように止めてしまいます。人をお
だてるのもよくないし、人におだてられて躍るのも人形です。幽霊の一種にすぎませ
ん。

先月号では、九星判断や、現世祈祷や、方角の善悪、日の吉凶、運命を左右する神
や、そうしたものによつて生きる人のことをやかましく言っておきました。人間は

好運の時は案外強いのですが、不運や病気や禍が続くと、つい運命論の幽霊になって、迷信に走ってゆきます。苦のどん底におとして見るとその正体を暴露します。

釈尊は両足尊であります。一切のこうした世界をふみ破つて、真の独立者として両足によつて立ち歩きたもう尊き人であります。我等は限りなく、両足尊にあこがれ、婦命命随喜せずにはいられません。

この独立者の天地を説き歩むべき仏教ですが、何時のほどにか世俗の迷妄に妥協して、盛んにおみくじを出したり、現世祈祷をやったりして、仏教本来の面目を棄てています。真宗を除いた他の全てがこれであると言つてもいい程であります。ここに於いて親鸞聖人は、

「五濁増のしるしには、この世の道俗ごとごとく

外儀は仏教のすがたにて、内心外道に帰敬せり。

かなしきかなや道俗の 良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつつ ト占祭祀つとめとす。

かなしきかなやこのごろの 和国の道俗みなともに

仏教の威儀をもととして 天地の鬼神を尊敬す。」

と悲歎せられるのであります。愚かにして弱きものが、人格独立の王座を捨てて、はてしなき無明界に流転するのであります。

宗教の人格的意義

宗教は決して我等が他律の世界、幽霊の世界に流転することを許しませぬ。自覚を2
おいて外に宗教はありません。

釈尊は天上の聖なる仏格の上に立つて「天上天下唯我独尊」を叫びました。

親鸞は大地に合掌して、人間性のどん底を諦観して「愚禿」を名告りました。

二尊は全く相反する態度を持ち、相対する意識を持ちながら、しかも両極相一致し、その根本において同一の生命に生き、同一の信念に住し、同一の純粹行に生きたもうてあることを明かに説いたものが、大無量寿経であらねばなりません。

宗教はそれが人格的な意味においてのみ、その意義を持つ。

我等は先ず無道義の世界から、道義の世界、自律の世界に移らねばならない。

そうして更に高次の立場からの批判と洗練とを受け入れて、純粹なる願の上に生きねばならない。

親鸞聖人は信の世界を表白して「自然法爾」と言われた。これ道義自律の世界を更に超えて、全一なる生命に輝き、究竟的態度、全人的生命愛に燃焼せられた世界の表現せられたる唯一の文字であらねばならぬ。

まことに如来は智慧によつて、生死を超えて理想の浄土、至純絶対の彼岸に立つて一切衆生を召喚したもうてある。真実の真実、善の善、美の美、普遍、永遠、平等、一なる光明の世界である。

南無阿弥陀仏とは、実にこの理想の彼岸より召喚したもう如来の名告りであり、その救済意志の表現である。

彼岸の光明は生死現実を限りなく否定する。この否定の現実のどん底に動くものは純粹なる願行である。如来の本願がそれである。如来の本願力とは実に大地に念ずる如来の大悲である。如来は彼岸に召喚しつつ、現実の生死にわけ入って、無明の生死界に働き、念じ、誓願する。彼岸にあつては名号と言ひ、現実にあつては本願という。

如来の願心は衆生の大信となる。願と信とは一体である。この信が外へと発展しては衆生の大行となる。大信大行ともに仏心の廻向顕現である。この久遠の眞実の廻向顕現によつて、衆生はあらゆる迷妄より覚めて、この唯一の彼岸に行歩し、本願の大道を現実の生死界に発見する。

かくして衆生は浄土へと生きて往く。往生とは欲生我國することであり、願生彼国することである。人格的意義におけるこの往生は、独立人格の内面的発展の過程であり、人格創造の道程である。もし多くの誤れる求道者の如く、往生を功利的な、低き人間の欲望の延長ととるならば、彼岸に往生するとは、地理的移動にすぎないことになりおわる。しかし経典は「教説」であつて「地理書」ではない。

もしそれ浄土教が、この人格的理想主義な意味をすてて、低級なる自樂の満足であるかの如くとられたる、現在多くの信者たちの如きものであるならば、如来は遂に「両足尊」であり得なくなり、衆生はあらゆる迷妄にさめずして、念仏といえども依然たる幽霊界のたわごとにおわるであらう。

ここに我等は限りなく両足尊に合掌し、帰命する。しかしそれはわずかの欲の満足のためではなくて、善悪の彼岸を越えて、理想の彼岸に願生せんがためである。